

拓く・創る

総合施設長 阪 口 光 男

昨今、商店などでも後継者がいないために廃業する人がいます。町内会の役員を引き受けてくれる人がおらず活動が出来ず解散する自治会もあります。民生児童委員も定員の2割を満たすことが出来ないという。高齢者施設も人材不足で開設できずに倒産するケースもあるとのことです。日本国中が人手不足です。我が法人も例外ではなく、今後の重点課題として対応しなければなりません。

このような状況の一方で「地域再生」「地域創生」「地域力強化」が叫ばれています。地域での生きがいづくりや孤立化の防止、子育て不安への対応等へ地域の力が求められていると同時に、介護職人材の不足から、地域で出来ることは地域で担ってもらうとの政策も進められており、さまざまな取り組みが進められているようです。政策の失敗を住民に押し付ける発想には厳しく対処しなければなりません。皆が『幸せ』な人生を送るためには、政策の責任を問いつつも住民自身も自らの地域をどのように形作るのかの責任を担わなければならないのも事実なのです。一人ひとりが問われています。

私たちの法人理念は『一人ひとりが安心して共に生活出来る福祉コミュニティの創造』です。地域にこそ福祉の原点があり、幸せづくりの根源があるとの理念と実践思想です。住民が担うべきことと、行政が担うべきことを互いに責任分担し、協働していく新たな仕組みを形成していくことが求められているのです。

私は、東京品川に生まれました。子供時代はガキ大将を筆頭に異年齢の仲間たちと、いろいろな遊びに興じて暗くなると家に帰るという毎日でした。隣近所とは、醤油を借りたり、電話を借りたりといった関係でした。仲間との遊びを通して社会の規範、人間関係の結び方や対処の仕方、他者への配慮などを学び、又、身体すべてを使つての遊びは、健康な身体の基礎をつくってくれました。地域社会は人間が成長する場でもあったのです。又、隣りに誰が住んでいるかが見えており、相互に助け合い、支え合い、見守りあっていたのです。そこでは、自分が受けたことに感謝をしてお返しをする互酬の文化がありました。しかし、近年は、隣近所とかかわることなく生活することも可能になってきています。生活スタイルが個別化し、不用意な干渉をして相互に傷つくことを避け、複雑化する人間関係の軋轢を最小限にする現代人の姿を『シゾイド人間』というそうです。

『声が届き、聞こえ、手をつなげ、足で行ける』範囲が、私たちの日常生活の地域社会の広さです。日常での関係性が、相互の生活を支える大きな力になってきたのも事実です。

今日、新たな地域づくりの活動が全国で生まれてきています。身近にある『声なき声に耳を傾け』『痛みをもつ人の痛みを担う』動きも広がってきています。すべての生活課題は地域社会で生まれます。地域社会での諸課題を解決するための在宅福祉制度は充実してきましたが、個を尊重しつつ地域の力で互いに支え合う力は十分ではありません。制度の不十分さに厳しく対峙しつつ、地域の課題を住民が、住民のために 住民の力で解決する今日的な地域社会の姿を模索する協働的な実践が私たちに問われています。

『ある社会が、その構成員のいくらかの人々を閉め出すような場合、それは弱くてもろい社会である』私たちとの日々関わりの中にある一人ひとりが、地域社会の一員として参加し役割を分担して生活する当たり前の日常を支援していくのが私たちの使命です。

それは共に地域を拓き創ることで実現できるのです。いくらかの人を閉め出すことなく、多様性と個別性を『承認』し、必要なものを『分配』する地域社会が求められています。相模原事件のような惨劇を二度と起こさないためにも『奪い合えば足らぬ、分かち合えばあまる』（マハトマガンジー）を心にとめ、一年を歩んでまいりましょう。